というと臨床に役立つ記事を多く引用している。たとえば、幻雲に少し遅れるが扁鵲と倉公の歴史考証に重点が置かれている浅井図南の『扁鵲倉公列伝割解』などとくらべての話である。この二本を用いて、『扁鵲倉公列伝』を読むと、ある程度は理解できるのではないかと思われる。

しかし幻雲をして「『倉公伝』の文章は詰屈、句読を分け難い」と言わしめている。とくに近年の中国の注釈はあてにならない。いまこの書物が出版されたことによって新たな『扁鵲倉公列伝』の研究が始まる。

本書は文部省平成6年度〜7年度科学研究補助金一般研究(C)、研究課題番号06807175「国宝・上杉本『史記』扁鵲倉公伝における月舟寿桂注の医史学的研究」(研究代表者：小曽戸洋)の研究報告書である。

(猪飼　祥夫)

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部編：東京都港区白金五―九―一、電話〇三―三四四四―六一六一、一九九六年三月発行、A4判、二五五頁、非売品)

現代語訳・注記・解題、松尾信一ほか
日本農書全集第六十巻『畜産・獣医』

日本農書全集の編纂は全七十二巻から構成されているが、その六十巻に『畜産・獣医』が登場している。

獣医史学の研究も他の史学分野と同様に、ますます細分化されて追究される傾向にある。本全集の執筆者はいずれも獣医史研究家として著名であり、テーマが近世江戸時代におかれているため、その資料の選択にも興味のもたれた処であったが、次の文献資料から収録組立てられている。

(い)小鳥の部『鶉書』慶安二(一六四九)年刊行、蘇生堂主人著　(ろ)犬の部『犬狗養畜伝』天保七(一七二二)年、暁鐘成著　(は)馬の部『厩作附飼方之次第』近世後期の出版、著者未詳　(に)牛の部『牛書』中国から渡来した原本の写しによって、延享元(一七四四)年頃製本されたが、作者は未詳　(ほ)馬の部『安西流馬医巻物』宝永七(一七一〇)年刊行、安西播磨守著　(へ)馬の部『万病馬療鍼灸撮要』宝暦十(一七六〇)年初版、平安隠士、泥道人著　(と)馬の部『解馬新書』嘉永五(一八五二)年、菊池東水著の七編である。

さらにこれらの底本のすべてに対して、執筆者の配慮にもとづく懇切で分りやすい現代語訳、注記、人物伝、豊富な図版等が付されているので、その紙幅は原書をはるかに越える量となり、解題の部だけを採りあげても、独立した参考書として組立てられているのが特徴である。したがって獣医史専攻でない私にも、江戸時代に刊行された代表的獣医、畜産書また動物図絵等を学ぶことが可能となり有意義であった。たとえば巻頭に記載されている底本に関連する珍らしい資料写真の数々、原書の漢文体に対する現代語訳の調合のとれた配置など、読者の目を思いはかる収録方法といえよう。

なお私見をはさみ、執筆者に失礼になるが、現代でも世界的にみればまだ消滅していない、人畜共通感染病「狂犬」に関する初期文献である、江戸中期の元文一（一七三六）に刊行された『狂犬咬傷治方』連山 野呂元丈著が本書に収められていないようである。この分野の研究に長年にわたり尽されている方々だけに、うなづけない感じを受けた。出版にはいろいろな事情が伴うものであるが、何かの機会に本書七資料の中に『狂犬咬傷治方』を加えていただきたく願っている（妄言多謝）。

前後するが、全集の初章を飾る、松尾氏執筆の総合解題「近世日本の畜産と獣医術」は、徳川幕府創建時代から出立して、漢方流全盛期を経て蘭方技術の導入されるまでの、わが国獣医界の流れを眺望した三〇ページの労作であり、高く評価される文献である。

なお医史学と獣医史学は、その研究過程に於て、一致する史実が発見される点からも、両者を結ぶ合同研究が、今後ますます進展することを期待する次第である。

（坂本　勇）

〔農山漁村文化協会：東京都港区赤坂七ノ六ノ一　電話〇三―三五八五―一一四五、一九九六年六月発行、A五判函入、六三二頁、定価七、〇〇〇円〕

R・コールダー著／佐久間昭訳『物語・人間の医学史』

本書の原著者は科学ジャーナリストで、米国では高名な方のようである。一九八二年に亡くなったそうであるから、そろそろ没後十五年を数えようとしている。従ってフルネームを知りたいと思い探したが、残念ながら書中に見出せなかったし、コールダーという姓の横文字綴りも不明である。元々、高校生向きの医学史啓蒙書だから、そこまでは不要と云ってしまえばそれまでなのだが……。

原タイトルは、Medicine and Man で、サブタイトルは、The Story of The Art and Science of Healing となっている。

せっかくのヒーリングという言葉が、日本語版の書名に生かせ切れなかったのは、如何なる手ちがいなのであろうか。本の腰巻に、呪術から科学へ、マクロな目でみる《癒しの術》、という文字がおどっている。

本の内容から考えると、むしろこちらの方の文字を利用した訳本タイトルにして貰いたかった。

本文は、次の十二部からなっている。

第1部　イモリの目とカエルの趾
第2部　悪魔、半神半人、医師
第3部　暗黒の千年
第4部　偉大なる進展（I）再び光明を